



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	新聞を用いた科学技術コミュニケーションの可能性：新聞づくりワークショップ実施の試み
Author(s)	伊藤，宏一；朴，炫貞
Citation	科学技術コミュニケーション，22，35-50
Issue Date	2017-12
DOI	https://doi.org/10.14943/81301
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/67959
Type	departmental bulletin paper
File Information	04_ito_35-50.pdf



ノート

新聞を用いた科学技術コミュニケーションの可能性 ～新聞づくりワークショップ実施の試み～

伊藤 宏一¹, 朴 炫貞²

Study for Newspaper as a Media of Science Communication In Case of Newspaper Editing Workshop

ITO Kouichi¹, PARK Hyunjung²

要旨

科学技術コミュニケーションにおいて、新聞は専門家と市民を橋渡しする上で大変有効なメディアとして存在している。しかしデジタル技術の普及で紙の新聞に対する関心は落ち、科学技術コミュニケーションにおいても考察が多いと言えない。新聞は高い信頼度、長年培った情報の編集方法は、情報社会の今において改めて新聞に注目する必要があるところだと言える。

その背景を踏まえ、「科学技術コミュニケーターに情報発信の手段のひとつとして、新聞という紙媒体の特徴を学んでもらい、読者に読まれる新聞づくりのノウハウを身につけてもらう。」を達成目標とし実践研究を行った。ワークショップでは新聞の特徴を学ぶとともに実際にDTPソフトウェアで新聞制作を行い、印刷までのプロセスを体験できる企画で実施した。そのことで紙の新聞をあらためて見直し、コミュニケーションの手段の一つとして新聞作りの手法を加えるきっかけを作ることを目指した。本稿は新聞制作ワークショップを事例に、新聞を用いた科学技術コミュニケーションの可能性について考察する。

キーワード：新聞，編集，ワークショップ

Abstract

This paper aims at considering the possibility of science and technology communication using newspaper as a case example of a newspaper editing workshop. In science communication, newspapers exist as a very effective medium as a media that bridges experts and citizens, but the interest in paper newspapers has declined owing to the spread of digital technology. Also there are not many considerations in science communication and newspaper. The newspaper has high reliability and it is said that the method of editing information that we have cultivated over the years is a necessity to draw attention to the newspaper once again in the information society.

Through in background, the author supposed that learning the newspaper editing method will be a powerful tool for information design on science communicators. In the newspaper editing workshop,

2017年3月14日受付 2017年11月7日受理

所 属：1. 北海道大学CoSTEP 12期研修科受講生，株式会社北海道機関紙印刷所制作課在職

2. 北海道大学CoSTEP特任助教

連絡先：pressmanxit@gmail.com

science communicators were practicing newspaper production with DTP software and carrying out the process up to printing. We reexamined the paper newspaper and added the opportunity to add a newspaper making method as one of means of communication.

Keywords: newspaper, editing, workshop

1. はじめに

北海道大学 科学技術コミュニケーション教育研究部門 (Communication in Science and Technology Education and Research Program; 以下, CoSTEP と記す) は, 高等教育推進機構 オープンエデュケーションセンターに所属されている教育・研究機関である。研究者と市民を橋渡しする科学技術コミュニケーションを, 座学や実践を通して探っている。市民と研究者が対話できるサイエンスカフェづくりから, デザイン, ライティング, アートなど多様な分野から科学技術コミュニケーション活動を行っている。特に多くの人が視聴できる映像や, ウェブ, パフレット・チラシ・冊子などの紙媒体まで, 様々なメディアを用いたコミュニケーションを行っている。その中で筆者は, マスコミュニケーションの媒体としては長年の歴史をもつにも関わらず, デジタル技術の発展によって近年取り上げられることが少なくなった「新聞」メディアをコミュニケーションツールとして活用できるきっかけを作りたいと考えた。特に紙媒体の新聞は, 独自の編集システムを持ち, その手法を学ぶことは情報の整理に大変有効なことだと考えたことが理由である。筆者が新聞を制作する印刷会社に長年勤めていながら現場で疑問や仮説を考えた背景もあり, 実践研究を実施するに至った。また, 本研究を通して今後紙の新聞の行方を考えること, また科学技術コミュニケーションにおける新聞のあり方を考えることを目標とした。

本稿では, 以上の背景から筆者の伊藤と指導教官の朴は 2016 年度 CoSTEP 研修科¹⁾での研究として, 「科学技術コミュニケーターに情報発信の手段のひとつとして, 新聞という紙媒体の特徴を学んでもらい, 読者に読まれる新聞づくりのノウハウを身につけてもらう。」を達成目標とした。その目標達成のために, 実際に新聞制作を体験するワークショップをおこなった。

2. ワークショップの準備過程

2.1 新聞の特徴

新聞制作ワークショップを企画する前に, 新聞とは何かに関して改めて確認しておくことから研究を始めた。

辞書には「社会の新しい出来事を速く (解説や批判などを加えて) 報道する定期刊行物」(新村出 2008) とある。「速く」は新聞の使命だが, インターネットには劣る (立花 2007)。しかし情報の垂れ流しではなく「解説」や「批判」を加えることが新しく起きた出来事を読者にわかりやすく伝える際の新聞の強みのひとつでもある。

チラシほど小さくはなく, 書籍や雑誌ほど制作に手間がかからないという特徴がある。新聞は, 読むために電源や特別な道具を必要とせず手軽に読むことができる。小さく折りたたんだり, 必要などところだけ切り抜いたりできて, 携帯性に優れているのも大きな特徴だ。

独自の編集システムを持つことも特徴としてあげられる。1 ページに詰め込まれた情報は, 新聞独特のルールで配置されている。たとえばタイトルのような文字を「見出し」といい, この文字の大きさ, 太さ, 背景の色や装飾の付け方によって, ニュースの大きさがわかる。見出しを見るだけ

で明るいニュースか、暗いニュースかまで、ひと目で判断できてしまう合理的なメディアである。また、新聞の発行自体が時を刻み記録となり、情報をまとめた時代の記録として存在することも大きな特徴だといえる。本稿では、この3つ目の特徴に特に注目して、新聞制作ワークショップを企画することにした。

日本最初の日本語日刊新聞は1871年1月28日に創刊された「横浜毎日新聞」であるが、ここまでは今日まで継続して発行され、部数でも最大だった新聞が新聞技術の上でもリードしたものと思われる。これをサンプルとし、7つの禁じ手など、新聞独自のルールの変遷をみることで、新聞の歴史を見ることにする。明治12年1月25日に創刊された朝日新聞は、1883年(明治16年)の1日平均発行部数が2万1000余で全国紙の首位となった(朝日新聞百年史編集委員会 1990)。これは1977年(昭和52)に読売新聞が720万部で朝日新聞の715万部を越えて首位となる(読売新聞グループ本社 2015)までつづいた。これらの経過により朝日新聞が今日まで継続して発行され、最大部数だった期間が最も長い新聞であることから、その紙面の変遷を見ることとした。

1879年(明治12年)の創刊号は、サイズも320ミリ×235ミリと現在よりも小さく、体裁も記事を流しただけだった。しばらく単調な配置がつづくが、大正8年以降の紙面では、見出しの強弱が現れ現在の割付の原型が伺える。昭和に入り、活字の種類が増えたのと、背景に模様が入る地紋的なものもでき、現在のスタイルが始まっている。活字の大きさなど印刷技術の進展とともに組版規則が確立していったことが伺える(宇野 1969)。

このような歴史を踏まえて、現在の科学技術コミュニケーションと新聞の関係性を考える。研究者と市民を橋渡しするうえで新聞を利用することは有効である。その方法は大きく2つに分かれる。1つは、既成の新聞(例えば全国紙)に取材してもらい記事にして掲載してもらう方法。これは新聞社が持つ一定の読者に確実に届けられるが、必ずしも意図が正確に伝えられるわけではない。またプレスリリースをどのように書くかといったテクニックも大切となる。

もうひとつは、科学技術コミュニケーター自ら新聞をつくり発信していく方法である。これは新聞社の都合によらず、伝えたいテーマに沿った発信が可能だ。しかし読み手に新聞を手にとってもらうには魅力的な見出し、写真、割付で作られた紙面でなければならない。少なくとも一般の新聞と遜色ない完成度の紙面でなければ手にとってもらえないか、すぐに捨てられるだろう。読んでもらうためには新聞制作のノウハウが必要だ。具体的には割付のルール、見出しの付け方、写真の配置などがあげられる。これらを身につけることで、新聞という有効な発信手段をひとつ増やすことができる。

2.2 新聞の現状

筆者の伊藤が勤務する(株)北海道機関紙印刷所では、伝統的に新聞制作のノウハウを持ち、業界の専門紙から団体の会報、高校生たちが作る学校新聞まで多くの新聞印刷に携わっている。学校新聞といっても、大判の新聞を発行する学校もあり全国紙と遜色ないレイアウトで北海道の高校新聞の質の高さを支えてきた(武石 1977, 1978)。

1981年の北海道高文連新聞コンクール参加校の縮刷版を確認したところ、弊社で印刷した学校新聞は43校に及んだが、今年はわずかに3校に止まっている。これは受注ができなかったのではなく、少子化により部活動が停滞したことや生徒の関心がネットやスマホに移ったこともあり学校新聞を発行する高校が激減している可能性がある。高校時代に新聞づくりに携わり、進学し、大学でも新聞会に参加—ということも過去には多かったが、今は北海道大学新聞も休刊中という事態であり、憂いる状況である。

しかし、新聞の特徴を学びより活かすことは、科学技術コミュニケーターにとって「発信」する

選択肢が増え、送り手にとっても、受け手にとっても、メリットがあるのではないかと考えた。そこで、何かしらの形で新聞づくりを支援できないだろうかというところから CoSTEP 研修科での研究活動に結びついた。CoSTEP では、様々なメディアをコミュニケーションのツールとして活用している。ウェブの使用が増えてきている今、あえて新聞を活用してもらうことは有用であると考えた。新聞が合理的なメディアであることは先にも述べたとおりであるが、私たちは新聞の作り手を育成し、科学技術コミュニケーションで活用するにあたり、達成目標を立てた。

〈達成目標〉「科学技術コミュニケーターに情報発信の手段のひとつとして、新聞という紙媒体の特徴を学んでもらい、読者に読まれる新聞づくりのノウハウを身につけてもらう。」

研究方法是実際に新聞制作を体験するワークショップ実践する実践研究の手法を用いた。今回は 1 回目ということと会場が印刷会社ということで、素材を揃えて「情報の編集」以降の作業工程で実施した。受講生には新聞の特徴や編集ルールは座学で学んでもらい、主に DTP²⁾ (編集・制作) の体験から印刷工程の見学までを体験してもらった。

2.3 ワークショップの実施概要決め

これらの達成目標を達成するため、「新聞づくりワークショップ」の実施を企画した。ワークショップの対象は、CoSTEP の本科の受講生である。大学院生と社会人が混じっていて、ライティング・編集、ウェブデザイン、対話の場の創造、「札幌可視化プロジェクト」などそれぞれ所属する実習が異なるが、何らかの形で「発信」しようとする共通意識を持っていた。普段 SNS などインターネットベースでの発信は行っているが、紙メディアにおいては、まだまだ未開の分野であるように感じた。Illustrator や InDesign など DTP ソフトが普及したとはいえ、実践的に使えるようになるには時間がかかり、学ぶ機会もそう多くはない。さらに新聞は読むことはあっても作ることは稀で、今の時代だからこそ逆に新鮮に見えるメディアであると判断した。

今回のワークショップは、筆者の伊藤が務める印刷会社で行うことは先に決定していた。新聞発行部数からも、前項で述べた高校生の新聞制作への関心が落ちているなどの現状を踏まえ、本研究の意義を理解してもらえたことから、場所提供や機材の使用、見学までの利用ができた。会社が休みの日が良いとのことから、実施日は週末と限定して日程を絞っていた。

ワークショップの目的は、科学技術コミュニケーターが新聞制作のプロセスを理解し、編集ルールを体験することで新聞を活用してもらえるようにすることだった。

限られた時間で実施することになると想定し、取材や原稿の執筆はせず、編集以降の作業に重点を置くこととした。しかし当日 PC に向かって初見でテキストと写真をレイアウトや編集をするというのは、とまどうであろうし時間がかかり作業がすすまないことも考慮し、事前配布資料を用意した。

テキストや写真については、事前に用意できる人には持参してもらい、用意できない人には、研修科で数種類を用意して使ってもらうこととした。テキストは「いいね! Hokudai」³⁾ から研究室の紹介記事など数本、他に(株)北海道機関紙印刷所の社内で配布されている冊子「ほっとニュース」⁴⁾ からエッセイ的な記事と写真を用意した。

事前に配布したものとしては、前配布資料 (A4 判, 16 頁), B8 切の割付用紙 (5 枚), 新聞づくりハンドブック (A12 切, 24 頁) などがある (図 1)。事前配布資料の内容は記事として使うテキストを新聞の雛型に合わせて組んで行数が確認できるようにした。仮の見出し画像も収録。新聞に親しみを持ってもらうため「しんぶん初耳学クイズ」や、ドラマの中の新聞の出来を見る「ドラマの新聞」も掲載した。さらに新聞のレイアウト練習のための割付用紙を 5 枚程冊子に折り込んだ。他、当日の予定表、会場へのアクセス案内、「新聞づくりハンドブック」も事前に配布した。資料作成に

あたり、執筆時間には個人差があるものの、ここでは冊子などアナログの印刷物の作成に要する時間をおおよその目安として明記することとした。資料作成についてはDTPにかけた時間は3時間程度だったが、新聞に親近感を感じてもらうために収録した「しんぶん初耳学クイズ」の問題の作成に思いのほか時間がかかり、資料集めなど含めて1時間×6日で6時間ほどを要した。「新聞づくりハンドブック」は今回のワークショップの主軸となる手順書だったので、8月ころから準備を始めた。書体や地紋の見本は社内で使用している資料から流用させてもらい、禁じ手など編集ルールは過去に社内で行われた「編集のてびき」などを参考にして現在の設備にあった内容で書き直した。執筆には1ヶ月(平日1時間×20日=約20時間)ほどかかり、レイアウトとDTP作業にも2週間(同=約10時間)ほどかかった。完全オリジナルを目指し写真の著作権の問題をクリアするため、基本的に著者の伊藤が撮影したものを使い、顔写真

のキリヌキ見本は伊藤本人の写真を使用した。これも広く配布可能な冊子を目指すためであった。

次に、参加者をどのように集めるかが検討した。研修科生としてCoSTEPの講義に出席していることで、講義終了後に色々な告知をしている時間を利用し、今回のワークショップの告知についてもこの方法でおこなうこととした。新聞形式のチラシ(図2(左))を用意して、8月6日と9月10日の2回実施し、参加者は7人となった。



図1 事前配布資料(上)・新聞づくりハンドブック(下)



図2 事前にワークショップの広報で使用了資料・広報の様子

3. ワークショップの実施

3.1 ワークショップの概要

本ワークショップは科学技術コミュニケーションが新聞制作のプロセスを理解し、編集ルールを体験することで新聞を活用してもらえるようにすること目的とした、紙の新聞を制作するための流れを(株)北海道機関紙印刷所の作業工程に沿ってまとめるとこのようにまとめられる。

- 1) 記事を書く→2) 写真を写す→3) 割付を作る→4) DTP ソフトで組版する→
- 5) 紙面を点検・修正して完成→6) 完成した紙面の印刷データを書き出す→7) 印刷→
- 8) 製本→9) 発送

一般的な DTP 講座は教室で実施することになるので、5) の紙面完成で終了となるところであるが今回は会場が印刷会社である特徴を活かし、完成した印刷データがどのように印刷工程を通過して納品されるのかを工場見学という形で体験することにした。全体の大きなスケジュールは新聞の特徴に関する座学から演習、見学にした。原稿作成から新聞納品まで一貫した流れを体験することで、机上ではわからない、新聞づくりのリアルな部分も理解しながら、新聞の作り手の育成の目的にも近づけたと考える。

ワークショップの会場は(株)北海道機関紙印刷所(札幌市手稲区曙)の会議室で行った。2016 年 10 月 29 日 13 時からワークショップを開始し、4 時間のプログラムで構成した(図 3)。会場の会議室には PC 4 台を設置し、参加者は 2 人 1 組となり相談しながら作業をすすめるようにした。

座学と演習を両方行うには、プロではない参加者にとって 4 時間は限られた時間だが、DTP 組版に最も時間配分をし、制作過程を体験できるようにした。

また、今回の受講者は Adobe Illustrator を多少さわったことがある人が多かったため同じ Adobe 系のソフトなので InDesign の操作方法には比較的時間をとらず、わからないことがでたときにすぐ解決できるようサポートスタッフ⁵⁾(DTP のプロ) 2 人が対応し解決できるようにした(図 4)。

3.2 座学

座学では、紙の新聞の意義、特徴、仕組みを、実例を示しながらわかりやすく解説するよう心がけた。また新聞独特のルールであるレイアウト上の「7つの禁じ手」も実例を出しながらレクチャーした。その内容は以下の3つである。

3.3 新聞の特徴—速報性

まず、新聞の特徴とは何かについて話を進めた。たとえば、突発事件が発生したとき、インターネット上のニュースサイトなら直後に「速報」として一報

予定時間	実際の時間		
1000	1000		伊藤到着
1100—1145	1100—1145		スタッフ集合
1145—1215	1145—1215		スタッフ昼食
1220—1300	1220—1300		手稲駅に行きお迎え
1300—1305	1300—	5分	自己紹介、予定確認など
1305—1315		10分	新聞記事の特徴
1315—1325		10分	見出しをつける
1325—1345		20分	新聞のレイアウトについて
	—1400		なぜ新聞は新聞に見えるのか?
1345—1415	1400—1430	30分	InDesign で組んでみる①
1415—1425	1430—1445		休憩10分
1425—1505	1445—1515	40分	InDesign で組んでみる②
1505—1525	1515—1530	20分	出力して、比べてみる合評①
1525—1555	1530—1555	30分	手直して完成へ
1555—1605	1555—1605		休憩10分
1605—1625	1605—1625	20分	出力～完成品をみんなで合評②
1625—1650	1625—1650	25分	工場見学 (2F→1F)
1650—1700	1650—1700	10分	まとめ、簡単なふりかえり
			お疲れ様でした。終了
1700—1800	1700—1800		かたづけ、撤収

座学
DTP 演習
所要時間 4 時間

図 3 当日の進行表と実際の時間

を伝えられるが、新聞は、印刷して運ぶという作業が必要で、物理的に絶対必要な時間がある。通常の朝刊の最終締め切り時間は午前2時とされ、その時間までの出来事を編集しわずか3時間後の午前5時には読者の元に届けられているというのは、驚くべき早さではあるのだが、インターネットには追いつかないし、追いつけるわけがないのである。それでも新聞は速報のために大変な労力を使っており、そのこと自体が意味を持つ。二つの例を紹介した。



図4 ワークショップの様子

最初は、8月14日の朝日新聞朝刊(図5(左))である。この紙面は「13版⁶⁾」となっていて札幌以外、小樽、後志などで配られているものだ。次に同じ日付だが「14版△」(図5(右))は、札幌市内に配布されたものだ。△印は14版を作成後に更に作り変えた印であり、最終版(その日の朝刊の完成形)でもある。

紙面を見ると、左上の記事が変わっているのがわかる。なにもなければ13版と同じオリンピックの記事だったはずだが、「SMAP 解散」は、それほどの労力をかけても差し替えるほどのニュースだったわけである。そのとき朝日新聞社はこのニュースを価値あるニュースと判断し差替えが実施された。インターネットニュースならテキストをかえてアップすればいいが、新聞はデータ差替→印刷用の刷板を再出力→印刷→発送と手間暇がかかる。場合によっては動いている輪転機を止めて、それでも差し替えるのは紙面に掲載すること自体がニュースであり、その判断の重みが違うということである。新聞は編集の責任がしっかりしている、紙面に掲載されること自体がニュースなのだとも言えるのである。



図5 新聞の特徴—8月14日付の朝日新聞朝刊13版(左)と14版(右)の紙面

3.4 新聞の特徴—信頼性

メディアの信頼度の調査結果でも「全面的に信頼している場合を100点、全く信頼していない場合を0点」としたとき、新聞は68.6点と高く、トップのNHKテレビの69.8点に次ぐ2位の信頼性となっている。このことから新聞への信頼性の高さがうかがえる（新聞通信調査会）。

新聞は一般的に紙面の上部と下部がギザギザになっているのだが、これは高速回転機で印刷したとき断裁した切り口の跡である。回転機は高速で1時間に10万部を印刷することも可能だ。別の視点から見ればギザギザは大部数を発行しているということ、それは多くの読者に支持されており、信頼の証でもあると考えられる。新聞紙面の形状自体が信頼性を示すというのもデジタルにはないことある。

図6の記事（朝日新聞9月27日付）はフェイスブック社のニュースサイトへの疑問が書かれている。サイトに掲載するニュースを、コンピュータによる自動選

別に移行したところ、予期せぬ誤判断があいつぎ、信頼性に疑問が出たというものでインターネットでの情報は信頼が低いとされる要因の一つとなっている。情報の選別と編集は、報道機関の根幹をなすものである。

図7は北大博物館に展示されている戦前の新聞だが基本的に今とあまり変わっていない、完成されたメディアといえる。記事は選別、編集され、整理されて紙面に掲載されている。100年以上の歴史のある新聞は「情報の選別と編集」をしながら、コンパクトな紙面に整理された情報を提供することを積み重ねたことで信頼を得ている。



図6 朝日新聞2016年9月27日付「ネット点描」

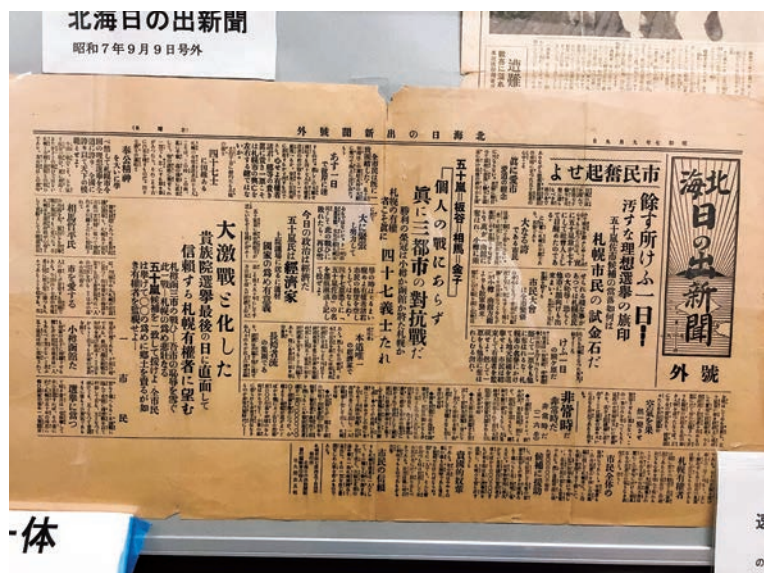


図7 北大総合博物館に展示されている戦前の新聞

3.5 新聞の特徴—編集

整理された情報はどのようにつくられるのか。新聞記事の定石として「結論から書く」そして5W1H (When (いつ) Where (どこで), Who (誰が), What (何を), Why (なぜ), How (どのように)) にそって書くというのがある。これらのルールに従うことで、どの記者が書いても、どんなできごとであっても要点を押さえて、わかりやすく伝えられるのである。新聞記事はほとんどがこの形式で書かれており、記事をどこから読んでも、だいたいのことがわかるというメリットがある。情報の整理の手法の一つを順守していることが、誰が読んでもわかりやすい記事となる大きな要因となっている。

「新聞はなんで新聞に見えるのか」について考えた。その理由として、紙の大きさや、題字に「〇〇新聞」と書いてあること、細かく段組みになっている点、見出しがあること、天地にギザギザがあることが考えられる。

いろいろな特徴があるのは確かだが、新聞独自のルールに沿った割付で組まれているからというのが一番大きいだろう。100年以上にわたり積み重ねてきた情報整理のノウハウがある。一方で禁じ手として、やってはいけないルールも確立している。それらを守ることにより読みやすくなり、新聞らしく見えるようになる。

その中で、新聞業界では「7つの禁じ手」⁷⁾というルールが使われている。新聞独自の割付ルールを今回のワークショップの中では「7つの禁じ手」と呼んだ。新聞社や印刷会社では呼び名の若干の違いはあるものの「組版の禁止事項」(北海道機関紙印刷所 1990)として共有されている。鉛の活字を使用していた時代の新聞社、印刷会社では一般的に紙の手順書はなく、技術は先輩から口頭で継承され改良が加えられてきたものと考えられる。

新聞制作における専門的な知識だが、原則このルールに従って制作されているため、新聞らしい紙面の特徴を体験するため、このルールを紹介した。

- 1) 「両流れ」 記事の流れは上から下へ、右から左へ流れることをいう。流れは1つで、2つの流れがあると、読者が迷う原因となるため、両流れは禁じ手となる。図8の見本ではAとBの流れが2つになっている。

- 2) 「飛びおり」 記事の流れは、見出しや段罫にぶつかれば、反射して下段へ降りていくのが決まりである。反射せず、読み手の目の流れに沿わ

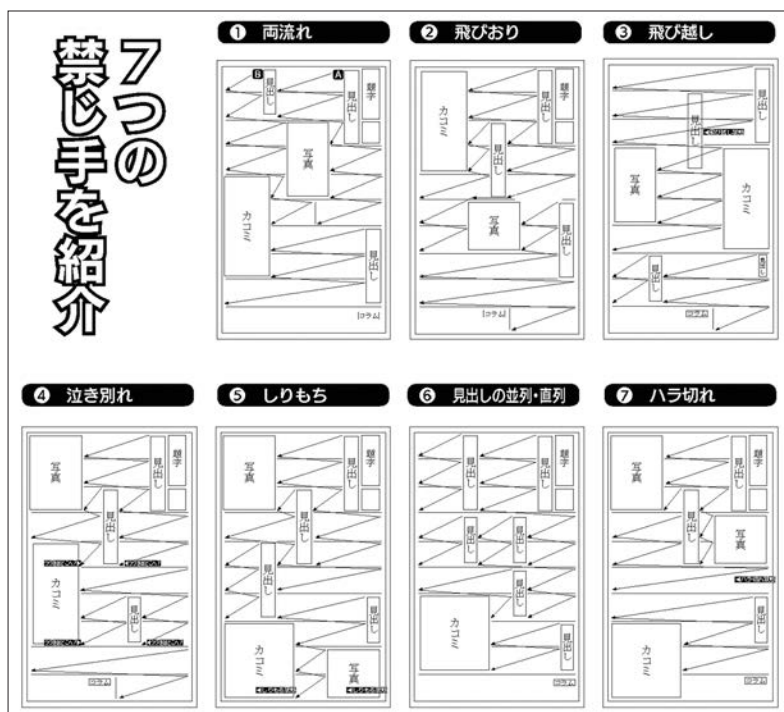


図8 新聞の割付「7つの禁じ手」

- ずに下の段へ行くことを「飛びおり」という。読者が迷うため、これも禁じ手である。
- 3)「飛び越し」「飛びおり」同様に、記事の流れが見出しを飛び越えることも禁じ手である。ただし、囲み記事は例外で見出しを飛び越えてもいい。本文でも段罫をはずせば囲み扱いなので、読み手は迷わないため飛び越えてもよいとされる。
 - 4)「泣き別れ」 段末で記事が「～。」で終わると、続きを見失ってしまう状態を「泣き別れ」といい、禁じ手にしている。回避するため1行送るなどの手法が使われている。
 - 5)「しりもち」 最下段に2段以上の写真や見出しを置くと、紙面の下半分が見た目で重くなり、バランスが悪くなるので、避けたい禁じ手である。
 - 6)「見出しの並列・直列」 同じ段数の見出しが横列や縦列に並ぶことをいう。バランスが悪いため禁じ手である。ただし選挙の候補者紹介などは例外で、あえて平等に並列させることもある。
 - 7)「ハラ切れ」 段罫が左右いっぱいに入る状態をいう。紙面が上下に分断された印象になるため禁じ手とされている。ハラ切れは両流れや見出しの並列・直列を誘発しやすいので注意が必要である。最下段のコラムなどは例外とされたり、囲み記事だけで紙面構成する場合も例外とされたりして、あえてハラ切れさせることもある。

3.6 演習

座学をふまえ新聞づくりの基本について学んでから、DTP ソフト InDesign を使い実際に新聞紙面を作成する演習を行った。作業の上で分からないことは会社のサポートスタッフ2人に声をかけてもらいながら問題を解決しつつ制作した。

まず配布したレイアウトは割付用紙にスケッチを書き込んでから PC に向かって作成した。このようにアナログとデジタルを使い分けるのも新聞制作の特徴の一つだと考える。手を動かして考えをまとめることと、紙の新聞を読む感覚の近さを体験してもらいたい意図だった。

90 分ほどで一次出力をし、確認作業を行った。今回実際に作成した新聞の大きさは B8 切⁸⁾ (382×270 ミリ=A3 より若干小さいサイズ) だが、出力は A2 に拡大をして確認した。壁に貼ってみんなで一次合評をおこなった。ディスプレイ上で見るのとは違って、より新聞のように見える。印刷業界でも点検は必ず紙に出して行うのが鉄則なのは、訂正を書き込むだけではなく、印刷時のイメージにより近いことというのが大きな理由である。やはり紙での出力は必須である。

出力紙を見て「新聞らしく見える!」といった声があがった。画面でのイメージとはだいぶ違うことを実感できたようだった。見出しの細さや、書体へ感想、流れが右上から左下へきちんと流れていることなどをお互い話し合った。一方で、一見新聞っぽく見えるものの、7つの禁じ手に沿わないところなども見つかる

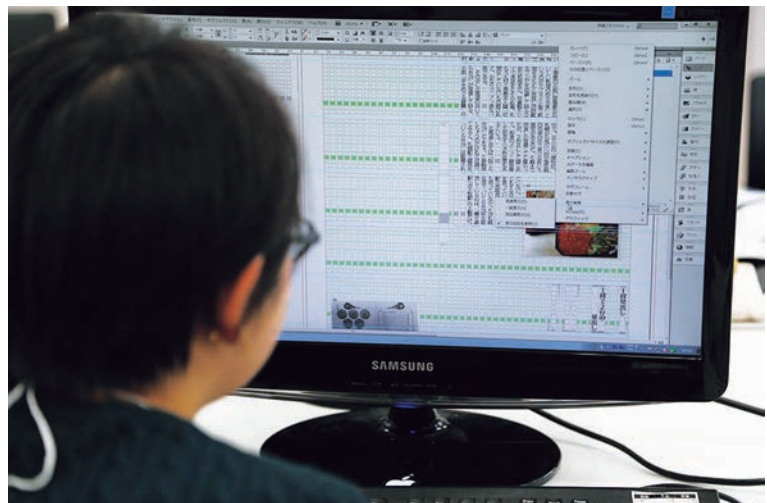


図9 DTP 演習の様子

り、より質を上げるための作業の必要性を感じた。そこからさらに DTP 作業を行い、二次出力をした。

限られた時間内だったが、全員が完成までのプロセスを体験することができた。今回は壁に貼って全員での講評を行なったので、より見やすくするため新聞のサイズから A2 判に拡大して出力した。紙のサイズで情報の読み取りがどれほど変わるかが体感できたと思われる。

その後休憩をはさみ、さらに修正を加えて完成したデータをもう一度出力して、壁に貼って最終講評を行なった。完成した新聞を並べてからは思わずみんなで拍手し完成を喜んだ。罫線を入れるだけで見出しの見栄えがよかったことなど、編集のルールを体験してからでの指摘があり、新聞編集の楽しさと難しさを同時に実感できたところで、演習は終了した。受講者が当日作成した新聞の縮刷版をオンデマンド印刷で作成し、当日と後日にわたって全員に配布した。



図 10 DTP 演習の様子。紙にアイデアスケッチをしてからデジタル編集に入るプロセスを勧めた。



図 11 参加者全員で講評している様子

3.7 見学

印刷会社は、短時間で製品を納品することにも応えるために設備を整え原稿を受け入れている。今回は、その作業工程も見てもらえたことは意義があることだった。

みんなが作った新聞はどのように印刷されて納品されるのかを学ぶため、会社の印刷工場を見学することにした。DTP 作業や画像処理を行う制作課の前工程から、印刷・製本の後工程まで作業工程に沿って見学した。案内は川原工務部長が担当した。作業工程に沿って 1) 印刷機にかかる刷版(さっぱん)の出力をおこなう CTP 室、2) 4 台の印刷機が並ぶ印刷フロア、3) 用紙の断裁や折機、製本機がある製本フロア、4) 発送フロアを順に案内した。参加者からは「印刷機は 1 時間

に何枚印刷できるのか」, 「4台の印刷機の使い分け方」, 「紙はどんな種類が使えるのか」, 「冊子の納品までの日数」など多岐にわたる質疑応答が行われ, 25分ほどの見学が終わった。普段は入れないところで実際の設備を見ながら, 作業工程に沿って実機を見ることは印刷全般の仕組みを理解することにつながったと考える。

後日配布した速報的な「ふりかえりのしおり」もオンデマンド印刷三つ折りで紙メディアにこだわりつつ終了できた。



図12 工場見学

4. ワークショップの振り返り

ワークショップを実施してよかったことは, 以下の3つであると考えられる。

まず1つとして, 参加者が新聞のルールが体験で習得できたことが挙げられる。新聞制作は使い慣れた Adobe の DTP ソフトを使用することで, 比較的容易に行うことができる。実際にワークショップでは受講生全員が新聞を完成させたことから, 体験を通して一定のルールは学べたと評価できる。たくさんの具体的な資料を見てほしかったので「この新聞のどこが駄目かを指摘するコーナーが個人的には面白かった」の声があり良かった。「新聞らしさを出す様々なテクニックを教えて頂き(理にかなっており), なるほどと思った。素人でも, そのテクニックに従えば, 新聞らしくなるのだと感心させられた」の声もあった。また, InDesign や新聞のルールでわからないことがあればすぐ対応できるようサポートスタッフを2人つけたのは「マンツーマンに近い状態で, じっくり教えてもらったのがよかった」と好評だった。DTP ソフトでの実習で, 実際に新聞を作ってみることは, 座学で解説した内容を体験する意味で大いに意義のあるものであった。見出しの大きさや写真の配置にも, 編集者としての主張が反映されることから, 受講者は配置の一つ一つを熟慮しながら制作にあたった。質問では, 記事の流れでうまくいかないところをどうするかといった内容が多かった。新聞らしく見せるためにどうするかを悩みながら仕上げていることがよくわかった。このような実践を経て, 2017年3月11日に行われた CoSTEP 12期修了式のポスター発表では, ワークショップ受講生が参加しているグループのポスターが新聞形式を用いて制作されていた。ひと目で新聞とわかる編集ルールに沿った作りになっており目を引いた。

2つ目は, 座学の時間を含め, 新聞が新聞らしく見える要素を分析できるようになったことである。新聞独自のルールなど, 手順書を使いながら説明することで, ポイントを絞れば理解しやすい。ワークショップでは30分ほどの説明だったが, 完全な理解に至らなくても画面上で何度も修正しながら行って最終的にはルールに従った形に至った。要点は十分に伝わったと考えられる。4時間という限られた時間でやや駆け足となってしまったが, 座学では紙の新聞を発行する意義や, イン

ターネットのニュースサイトとの編集手法の違いを具体的な例を示しながら解説したところが印象に残ったという。普段何気なく見ているニュースサイトと、新聞が手間をかけて記事の差替えを行っていることは特に伝えたかった内容であり、実際に「SMAP 解散」のニュースを例として、札幌市内に配られた紙面で、記事の入れ替えを行ったことを、説明すると「こういうことをやっているのか」といった感想も聞かれたし、新聞に掲載されることがニュースといった説明にも「紙の媒体で出すニュースの重みの違いがわかった」といった声もあり、座学の主旨は少なからず伝えることができたのではないかと考えている。ワークショップの前に事前学習ができるように資料を配布したことも、振り返りにも活用できる貴重な資料だったという声があった。

3つ目は、実際制作が行われる現場を見学できたことが挙げられる。座学と演習に続き、普段自分が目にする印刷物の制作過程を体験することで、新聞づくりに関する意識や、新聞を届けるまでに関わる様々な人の努力が分かるような機会になった。

回収したアンケートでは、「いままで新聞や新聞づくりに関心があったか」という問いに対して、少しあったが4人、なかったが2人という制作経験が豊かではない参加者がほとんどだったが、「ワークショップ後、関心が持てたか」に対する質問では5人がとても持てるようになったと答えており、目指したところへ引き寄せることができたと考えられる。

その一方で、反省点も残る。大きく3つでまとめる。

1つ目の反省点として、時間が限られていたため、徹底した指導ができなかったことがある。今回の受講生は Illustrator を使用したことがある人も多かったので、InDesign の使い方は基本的なことにとどめても大丈夫だろうという判断だったが、アンケートでは「意外と PC のソフトウェアに慣れるところの時間がかかった」「終わってから、もうちょっとあそこをああ直せばよかった…などを思った」「インデザインの使い方はもう少し丁寧に教えてもらってもよかったかな」「簡単なマニュアルがあればよかった」といった声が多く、もう少し丁寧な説明が必要であり、簡単な手順書を事前資料に付け加えるべきだったと感じた。改善方法として、ワークショップの時間を今回の4時間から午前・午後のプログラムにして約6時間にすることや、記事の作成と組み合わせて2回を1セットにする方法が考えられる。

2つ目の反省点は、資料作りの葛藤だった。座学では PowerPoint を使用したが、スライドに連動する資料は作らなかった。これは「新聞づくりハンドブック」もあるからと考えたからなのだが、「座学の説明のとき、スライドと対応する資料がほしかった」、「テキストを見てもよいのか、見てよいならば、いまどのページに載っているのかを示したほしかった」、「スライドの字がかなり細かったのが何枚もあった。テキスト何ページ参照と書くか、口頭で伝えるかが必要と思う」との声があり、何を見ればいいのか迷わす結果になったことは反省点だった。PowerPoint と連動し全体を通して見る資料が必要だったという解釈もできるが、その反面自主的に学ぶためのワークシートを考えるなど、より積極的な学習ができるように工夫することも必要だったと考える。事前資料の作成に時間がかかることや、ワークショップ終了後にも様々な資料で結果をまとめることにかなりのエネルギーを消費したが、より効率よく資料の制作を行うことも今後の課題とする。

3つ目は、新聞制作に関する内容のことである。記事を執筆するまでには手が及ばなかったため、既存の記事を用いて新聞のレイアウトにしたが、やはり新聞用として作成されてない記事だったため文章の性格が新聞らしくなかった点が目立った。内容がそうでなくても新聞のルールに従ったら新聞らしく見えるところは体験できたものの、新聞らしさを目指すには中身も非常に重要であることが実感できた。今後の改善方法としては、新聞記事の作成に関する演習を行い、その素材を元に新聞制作ワークショップを行うと、より質の良い新聞が出来上がると考える。内容を、科学技術コミュニケーションに関するものにとすると、新聞の特徴を生かしてシリーズ化や、他のイベントと組

み合わせるなどの展開が考えられる。

ワークショップで学んだことを実践で試してみる、これこそ科学技術コミュニケーションに新聞を用いることへの可能性を感じさせる活動であったと考える。達成目標の評価にあたり、不十分な面はあるものの、ワークショップでの学びを実践に移す活動が見られたことは、その可能性を広げる一歩であると考えられる。今後のワークショップなどの継続や充実により「科学技術コミュニケーターに情報発信の手段のひとつとして、新聞という紙媒体の特徴を学んでもらい、読者に読まれる新聞づくりのノウハウを身につけてもらう。」という達成目標は達成されたと考えるに至った。



図 13 ポスター会場での様子

ワークショップ終了後には、

2017 年 3 月 11 日に北海道大学フロンティア研究棟で行われた 2016 年度 CoSTEP 修了式のポスター発表会場で、1 年の実践研究について発表した。A1 判のポスターが新聞となっていた。題字があり、写真や野線がかかった囲み記事がある。記事は右上から左下へ流れ、写真は死角の左上に配置されており、遠くから見ても新聞とはっきりわかった。なかでも 2 面は上段と下段の見出しが直列状態にならないよう上段は横見出し、下段は縦見出しと使い分けしているあたりは、禁じ手に沿ったものである。4 コママンガや広告的な配置もあり、ワークショップで作成したもの以上の完成度となっている。

5. まとめ

100 年をこえる歴史の中で培われてきた信頼性を持つ紙の新聞は、現代においてはインターネットによるニュースサイトやメールマガジンとの競合の中で、やや劣勢の立場となっている。筆者は、そんな中でも、紙の新聞に生き残ってほしいと願っている存在である。紙の新聞を作るということはワークショップでも学んだように、多くの手間と時間がかかる。紙面は最先端のデジタルツールである DTP を使い作成するが、その先は印刷というアナログな分野を経なければならないからだ。しかし、紙に印刷というアナログであるからこそ作成に多くの人々が関わっていくことで、紙の新聞の存在が認知され、価値が認められるのではないだろうか。

本稿ではふれることができなかったが、紙の新聞には紙面の中で、いくつもの記事を一気に読むことができる「一覧性」の特徴がある。そして紙面は例えば国際面、文化面、スポーツ面のように分かれ、テーマごとに全体像が読み取れる「俯瞰性」がある。さらに採している記事以外で、関連のない記事も読めることでそこでまったく違った視点を持てる「偶有性」がある。

このように紙の新聞の魅力は大きい。そして培われた信頼性を背景に持つ紙の新聞を、私たち科学技術コミュニケーションが使わないのはもったいない。もっともっと利用する機会があっていい。そのために作り手を支援するワークショップなどの継続、充実を目指したい。



図 14 最後に完成した新聞を持って撮った集合写真

謝辞

サポートスタッフとして参加してくれた、同社の川原烈夫さん、伊藤ひろ子さん、横断幕、案内板、ネームプレート、クリアファイルなどの作成で協力をいただいた竹林香葉子さん、重原利佳さん、会場設営で協力いただいた制作課の方々、また参加したCoSTEPの受講生に、この場を借りてお礼を申し上げたい。



図 15 参加者に後日配布した縮刷版とふりかえりのしおり

注

- 1) CoSTEPの本科・選科の修了者が対象で、自ら主体的に実践や研究を企画し実行し、科学技術コミュニケーションに関する活動(実践活動や研究)の幅を広げることを目的とした教育・研究機関。
- 2) Desktop publishingの略。書籍や新聞の編集・組版作業をPC上で行うこと、またそのソフトウェア。現在は、Adobe IllustratorやInDesignが主流で、今回のワークショップでもInDesignを使用した。
- 3) 北海道大学の魅力を共有し、学内外に発信するためのFBページ。北海道大学 高等教育推進機構 科学技術コミュニケーション教育研究部門(CoSTEP)が教育研究活動の一環として運営している。
- 4) ㈱北海道機関紙印刷所の社内自由貸出し文庫のPR誌として創刊された冊子。内容は村上春樹さんが歩いた札幌の街を辿ったり、古書店紹介特集などいろいろ。新社屋に移転後貸出文庫は廃止されたが、冊子だけは不定期に発行されている。
- 5) 川原烈夫 1974年㈱北海道機関紙印刷所入社。工務部長。工場全体の総責任者。印刷全般の作業工程、作業管理、画像管理、DTPソフトの運用が専門、JAGAT認証DTPエキスパート。
伊藤宏一 今回のワークショップ主催者。1981年㈱北海道機関紙印刷所入社。工務部制作課所属。新聞や書籍を制作する作業に従事。印刷全般の作業工程、組版ルール、編集ルール、スクリプト作成、DTPソフトの運用が専門、JAGAT認証DTPエキスパート。

- 6) 新聞は、印刷拠点から遠く離れた地域に配達する新聞を、早い時間から順番に印刷する。その順番を示したものがこの番号。新聞社によって番号は違うが、夕刊のない地域は10版、朝夕刊セットの場合は夕刊2版と朝刊12版がセットとなるなどのルールがある。
- 7) 印刷会社や新聞社によって呼び名に若干の違いがあるが、主旨は変わらない。今回は(株)北海道機関紙印刷所が1990年に発行した「編集のしおり」に収録されている名称で統一した。
- 8) 新聞用紙の名称。輪転機用の巻き取り紙を基準に決められている。大4切は546×406ミリ、大8切は406×270ミリ、B4切は546×382ミリ、B8切は382×270ミリとなっており、A判、B判とは違う系列となっている。

●文献：

新村出 2008:『広辞苑』第六版, 岩波書店.

朝日新聞 2016:「柔道復活」『朝日新聞』2016年8月14日朝刊13版, 第1面.

朝日新聞 2016:「SMAP 解散」『朝日新聞』2016年8月14日朝刊14版, 第1面.

朝日新聞 2016:「ネット点描」『朝日新聞』2016年9月27日朝刊, 第17面.

朝日新聞百年史編集委員会 1990:『朝日新聞社史 明治編』朝日新聞社.

北海道高文連新聞部 1981:『昭和56年度北海道高校新聞コンクール参加作品縮刷版』旭プリント株式会社.

村上徹 2014:『DTP & 印刷ルールブック 2007』ワークスコーポレーション.

新聞通信調査会『第9回メディアに関する全国世論調査 2016 調査結果の概要』.

http://www.chosakai.gr.jp/notification/pdf/report12_2.pdf (2017年4月12日 閲覧).

高道章・澤田みどり 1990:『編集のしおり』(株)北海道機関紙印刷所.

武石文人 1977:『北海道高校新聞史 (上)』(株)北海道機関紙印刷所出版企画部.

武石文人 1978:『北海道高校新聞史 (下)』(株)北海道機関紙印刷所出版企画部.

立花浩司 2007:「科学コミュニケーションとメールマガジン:「サイコムニュース」が目指すもの」『科学技術コミュニケーション』1; 113-116.

宇野博 1964:『重要紙面でみる朝日新聞90年』朝日新聞社.

読売新聞グループ本社 2015:『読売新聞140年史』中央公論社.